

江戸時代、五街道の一つである甲州道中の宿場であった日野宿は、下りの府中宿と上りの八王子宿に人馬の継立てを行っていました。継立てとは、人や荷物を運んできた人足や馬を一宿ごとに付け替えることで、同じ人馬で幾つもの宿場を通過することは特別な場合を除いては許されませんでした。そのため各宿場には定められた数の人足と馬を用意することが課せられていました。最も重要な街道である東海道は人足 100 人と馬 100 疋、中山道は 50 人・50 疋が用意されていましたが、これらの街道より交通量の少ない甲州道中は、25 人・25 疋が用意されていましたが、これらの人馬は將軍の朱印状や老中・道中奉行の証文などによる無償で使用できるものと、^{おきだめ}御定賃銭といわれる公定の値段によって使用できるものがありました。御定賃銭は各宿場の高札場に掲げられていましたが、日野宿には甲



州道中の府中宿・八王子宿の他に、小川新田までの御定賃銭も掲げられていました。これは日野宿が五街道に次ぐ重要な街道である脇往還の一つ^{いわつきみち}岩槻道への継立ても行っていたからです。

岩槻道は、岩槻宿（さいたま市）と日野宿を結ぶ街道で、岩槻宿から原市町（^{あげお}上尾市）、与野町（さいたま市）、引又町（志木市）、清戸村（清瀬市）、小川新田（小平市）を通り日野宿に至る街道です。

これらの町村はいずれも幾筋もの街道が交差する交通の要所でした。

起点の岩槻宿は將軍が日光東照宮に参詣する際に通った^{にっこうおなりみち}日光御成道の宿場で、將軍の日光社参の時に宿所となった岩槻城がある所です。岩槻宿の継立ては、日光道中の幸手（幸手市）・越ヶ谷（越谷市）・^{かすかべ}粕壁（春日部市）の各宿場と御成道の大門宿（さいたま市）等多くの宿場を結んでいました。

原市町は中山道の上尾宿に隣接し、桶川・鴻巣・大宮宿などの各宿場に通じていました。

与野町・引又町も同じく多くの街道に通じた交通の要所でしたが、両宿の間を流れる荒川・新河岸川は水運が発達し、羽根倉河岸や引又河岸等は、江戸との物資の輸送が盛んに行われた所です。

またこの辺りでは、岩槻道を奥州と相模・武蔵を結ぶ街道と言うことで奥州街道とも呼ばれていました。

与野町や与野町から荒川に向かう街道筋には、「是より 甲州道」と刻まれた庚申塔が今も残っており、往時の往来を偲ばせます。